



Title	JA女性組織部員の意識と行動：JAふくしま未来のアンケートを素材として
Author(s)	小川, 理恵
Citation	フロンティア農業経済研究, 23(1), 12-19
Issue Date	2020-08-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80052
Type	article
File Information	23(1)_02_ogawa.pdf



[Instructions for use](#)

JA女性組織部員の意識と行動 — JAふくしま未来のアンケートを素材として—

北海道大学大学院農学院 小川理恵*

Analysis of Willingness and Behavior among JA Female Division Members:
Questionnaire Survey in JA Fukushima-mirai

Rie OGAWA*

Graduate School of Agriculture, Hokkaido University

Summary

With increasing consideration of “vitalizing local economy” and “women empowerment” in policy development, expectations among JA female division members with regard to the unification of female farmers within a broader framework has also tremendously increased. However, the number of JA female division members is steadily decreasing across the nation. Based on a questionnaire survey conducted among the female division members of JA Fukushima-mirai, the present study explored the relationship between willingness and behavior among female division members to prepare recommendations regarding the vitalization of this division in the future.

I はじめに

JA女性組織^{注1)}の活動は、女性農業者自身だけではなく、広く地域住民を巻き込む形で展開している。それらはファーマーズマーケット（農産物直売所）拡大の基礎となった地産地消活動や、行政ではカバーできない高齢者福祉分野での助け合い活動など、社会全体のニーズをとらえた地域活動に及んでいる。JA女性組織は、現在も活動の幅を広げながら、地域活性化の先導者として各地で重要な役割を果たしている（小川[3]）。地方創生と女性活躍が政策の主要な柱の1つとして掲げられるなか、JA女性組織への期待は今後も高まりを見せると思われる。

しかし、JA女性組織自体は部員の高齢化が進行し、部員数は減少の一途を辿っている^{注2)}。そのため、その活動を次世代へつなぐことが極めて厳しい状況にある。JA女性組織の活性化はJAグループ全体の課題となっており、JA全中やJA全国女性組織協議会（以下、女性協という）ではJA女性組織に対するアンケート調査等を用いて活性化の方策を模索している。しかし、JA全中のアンケートではJA女性組織の組織数や部員数の把握に留まる。また女性協のアンケートでは部員のJA女性組織活動に対する意向や評価について調査が行われているが、JA毎の回答者は数名に限られるため、回答者を選択する際に調査を依頼しやすいリーダー的役割を担う者に偏る傾向

* Corresponding author : r-ogawa@japan.coop

があることは否めない^{注3)}(堀田[1])。

既存研究においては、坂本[4]が直近にJ A女性組織のリーダー層となる50代の部員を中心にアンケート調査を行い、女性たちの生活実態を把握しながら、J A女性組織活動への関与と意識について分析を行っている。

これらの調査や研究ではJ A女性組織そのものが主体となっており、部員はJ A女性組織を構成する要素として位置づけられている。しかし現在では農村女性を取り巻く環境も大きく変わり、J A女性組織以外での組織活動や個人での自己実現に向けた活動も活発に行われるようになってきている。J A女性組織を主体とする議論だけではその活動内容と部員の意向とに齟齬が生まれる可能性がある。高橋[5]はその点を指摘しているが実証はされていない。

筆者は、J A女性組織の活性化とは、部員が積極的かつ自主的に参加意欲を持てる活動を行い、自分の居場所として認識できる組織となることだと考える。つまり、J A女性組織研究においても、部員である女性個人を主体としてとらえた研究の蓄積が必要である。

そこで本論では、福島県のJ Aふくしま未来・福島地区(以下、同J Aとする)の女性組織部員(以下、メンバーとする)に対して実施した「J A女性組織部員の意識と行動に関するアンケート調査」(以下、アンケート調査とする)により、まず、J A女性組織活動の枠を超えたメンバーの資質や性格を明らかにする。次にメンバーのJ A女性組織活動への評価と課題点を整理し、続いてメンバーによる活動への評価と活動参加頻度の関係性について明らかにする。最後に、その結果をもとに、J A女性組織を活性化させるための新たな方向性について示唆を行う。

アンケート調査は2017年11月に実施した^{注4)}。同J Aを選定した理由は以下の2点である。1つ目は福島地区の地域特性である。同J Aは福島市

と川俣町を管内としている。福島市は県庁その他官公庁の所在地である一方、川俣町も含めた管内全体は、モモやナシを中心とした果樹の特産地である。1つの地区に都市部と農村部が含まれていることにより、J A女性組織のメンバーに農家と非農家が混在していると考えられる^{注5)}。近年、農家数の減少や広域合併の進展等によりJ A女性組織においても非農家が増加しており、農家・非農家両者の需要を満たす組織づくりが課題となってきた。2つ目はメンバーの高齢化が進んでいる点である。J A女性組織メンバーの年齢は、全国の数値^{注6)}では、60歳代以上が76%であるが、同J Aでは90%を占めている^{注7)}。全国のJ A女性組織で課題となっている高齢化問題が同J Aでは先行しており、全国のJ A女性組織がこれから直面するであろう新たな局面をすでに迎えていると考えられるのである。

注1) 個別のJ Aにより「女性組織」や「女性部」など呼称が異なるため、本論では総称して「女性組織」とした。ただし対象とするJ Aふくしま未来は「女性部」である。

注2) J A女性組織のメンバー数は、最盛期の1958年には344万人を数えたが、1980年代以降減少が加速し、2014年には61万7000人、2018年には54万5000人と、最盛期の15.8%にまで減少している(女性協「J A女性読本—J A女性組織を知る22のコンテンツ—」2019年)。

注3) 毎年J A全中によって実施される『全J A調査』、女性協によって数年間隔で実施される『J A女性組織意向調査』があり、後者は女性組織の事務局を対象とした『J A女性組織事務局調査』とメンバーを対象とした『J A女性組織メンバー実態調査』から構成される。後者の最新の調査は2015年5月～7月に実施されている。

注4) J C総研(現・日本協同組合連携機構)における調査である。アンケート配布方法はJ Aの担当者およびJ A女性組織の役員が直接メンバーに配布する形とし、回収方法はメンバーの本音を導き出す目的から、J Aを介さず回答者が直接投函する郵送回収法をとった。配布数1,869件に対して728件の回答を得た。回答率は39.0%である。

注5) アンケート回答者のうち、販売農家は39.2%、自給的農家は38.3%、非農家は21.0%である。

注6) J A全中「平成30年度全J A調査 調査結果」による。

注7) J Aふくしま未来・福島地区からの聞き取りによれば、女性組織全所属員のうち60歳以上が占める割合は90%であるという。

II J A女性組織メンバーの資質

まず回答者の年齢構成を把握しておく(表1)。

有効回答数728人のうち、9割以上を60歳代以上が占めており、50歳代以下はわずか65人(8.9%)にとどまる。60歳代以上が占める割合は、前述のように非回答者も含めた数値(90%)とほぼ同様であり、同J Aでは全国平均よりも高齢化が進んでいるといえる。

メンバーの就農については、自給を含め「自家で農業を行っている」との回答は、基幹的従事が226人、補助的従事が260人と、合計で486人(66.8%)を占めた。また、会社等への勤務、自営、パート・内職など、職業の有無(農業への従事と複数回答)では、196人(26.9%)が職業従事者であった。農業あるいはその他の職業に従事している人の総数は513人(70.5%)となった。

さらにこのうち、子供の育児または

表1 J A女性組織の年齢構成

単位：人、%

項目	人数	比率(%)
30代以下	4	0.6
40代	14	1.9
50代	47	6.5
60代	294	40.9
70代	267	37.2
80代以上	92	12.8
計	718	100.0

出所：アンケート結果をもとに筆者作成

注：未回答は10である。

孫の育児の手伝いをしている人は113人(22.0%)、家族の介護や看護をしている人は77人(15.0%)いる。

以上の結果から、メンバーの高齢化が進んではいるが、70.5%が農業あるいはその他の職業に従事し、そのうち20.0%が育児に、15.0%が家族の介護・看護に携わるなど、メンバーは総じて多忙な生活を送っていることが明らかになった。

III J A女性組織メンバーの性格

1. 資格の保有

続いてメンバーの性格を見てみたい。取得している資格とそれを活かしている場所を表2に示した。自動車・バイクの免許は483人(66.3%)が取得している。介護士・ヘルパーの資格取得者は95

表2 取得資格と活用場所

単位：件、%

項目	合計	JA女性組織		他の地域活動		仕事で活用		生活・趣味で活用	
	件数	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
自動車・バイクの免許	483	164	34.0	108	22.4	202	41.8	248	51.3
教員	25	1	4.0	1	4.0	0	0.0	2	8.0
看護師・保育士	45	6	13.3	6	13.3	6	13.3	0	0.0
調理師・栄養士	39	6	15.4	2	5.1	3	7.7	8	20.5
介護士・ヘルパー	95	7	7.4	8	8.4	17	17.9	6	6.3
簿記	76	2	2.6	1	1.3	16	21.1	5	6.6
宅建	20	0	0.0	0	0.0	1	5.0	0	0.0
華道・茶道・舞踊・着付け・和洋裁	78	8	10.3	9	11.5	1	1.3	28	35.9
理容師・美容師	4	0	0.0	0	0.0	1	25.0	1	25.0
その他	38	5	13.2	8	21.1	6	15.8	7	18.4
計	903	199	-	143	-	253	-	305	-

出所：アンケート結果をもとに筆者作成

注：複数回答である。

人(13.0%)と多く、これは1991年にJA全中が打ち出した「介護リーダー1万人養成運動」の方針^{注8)}を受け、取り組んだ結果である。

また看護師・保育士が45人、調理師・栄養士が39人、理容師・美容師が4人など、専門的な知識を備えたメンバーが多数存在している。

一方で、華道・茶道・舞踊・着付け・和洋裁など、趣味の延長線上で資格を取得しているメンバーも78人いた。

しかし、それらの資格を活かしているかを尋ねると、地方生活に欠かせない自動車・バイクの免許を除き、活用の場面は限定的であった。JA女性組織を見ると、介護士・ヘルパーは7.4%、簿記は2.6%にとどまり、調理師・栄養士、華道・茶道・舞踊・着付け・和洋裁は、生活・趣味での活用率に比べ、JA女性組織における活用の割合が低かった。

2. 趣味と特技

趣味や特技と、それを活かしている場所を尋ねた結果が表3である。料理や手芸のほかにスポーツをあげるメンバーが多い。自由記入欄(その他)には、カラオケやダンス、俳句・川柳、ガーデニングなど、実に多様な項目についての記載があった。趣味・特技は、資格(表2)に比べ活用の機会が多い。なかでも料理(51.8%)と手芸(42.3%)

表3 趣味・特技と活用場所

単位：件、%

項目	合計		JA女性組織		他の地域活動		個人的に活用	
	件数	比率(%)	件数	比率(%)	件数	比率(%)	件数	比率(%)
料理	274	51.8	142	51.8	38	13.9	90	32.8
手芸	286	42.3	121	42.3	35	12.2	96	33.6
書道	84	1.2	1	1.2	3	3.6	30	35.7
絵画	76	9.2	7	9.2	7	9.2	15	19.7
朗読・読み聞かせ	70	12.9	9	12.9	7	10.0	13	18.6
華道・茶道	120	27.5	33	27.5	14	11.7	43	35.8
スポーツ	191	25.7	49	25.7	58	30.4	62	32.5
その他	142	35.9	51	35.9	40	28.2	41	28.9
計	1243	-	413	-	202	-	390	-

出所：アンケート結果をもとに筆者作成
注：複数回答である。

は、JA女性組織における活用の割合が特に高かった。JA女性組織はメンバーの多様な趣味や特技を発揮する場となっているが、まだ拡大の余地があるといえよう。

3. 日常生活における不安

次に、メンバーの「日常生活での心配ごと」を聞いた結果が図1である。「家の農業の将来」(194人、26.6%)、「収入や生活費」(83人、11.4%)など、家業・家計にまつわる項目が高い数値を示している。また、「自分や家族の健康・老後」(144人、19.8%)という、メンバーの高齢化を反映した項目の回答も多かった。さらに、「子供の結婚」が53人(7.3%)おり、農村部における嫁不足問題と、社会全体の非婚化・晩婚化傾向が、アンケートにも反映されている。

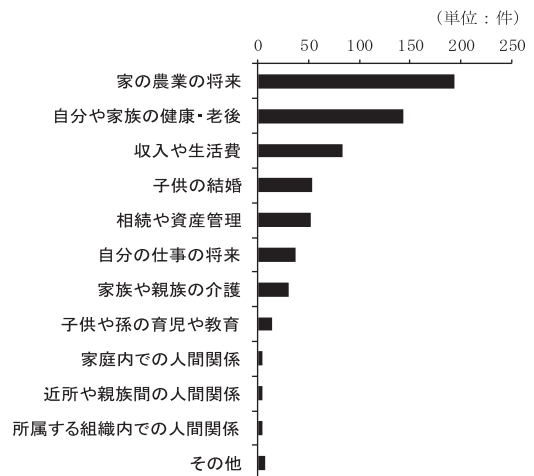


図1 日常生活での心配ごと

出所：アンケート結果をもとに筆者作成
注：複数回答である。

4. 小活

JA女性組織のメンバーは、多種多様な資格を有しているが、JA女性組織で有効活用しているのは一部の保有資格に留まっている。趣味や特技についても多様であり、料理を中心にJA女性組

織がそれらを活かす場となっているが、まだ活躍の機会を拡大させる余地がある。つまり現在の活動に固執せずに、メンバーの多様性を活かして活動の幅を広げることが、JA女性組織においては可能であり、メンバーの保有する資格、趣味や特技とメンバーの関心事を関連づけた活動を組み立てることが、JA女性組織の活性化には有効だと考えられる。

注8) JA全中は1991年に女性組織・生活指導員を対象に「介護リーダー1万人養成運動」の方針を打ち出した。この運動により、全国のJAで女性組織を中心に10万人以上のヘルパー資格者が誕生した。

IV メンバーのJA女性組織への評価と参加頻度

1. JA女性組織への評価点

メンバーがJA女性組織に対してどのような評価を行っているかをまとめたのが表4である。「とても魅力を感じている」「ある程度魅力を感じている」の合計は494人であり、未回答者を除き73.6%がJA女性組織を「魅力がある」と評価している。

次に、JA女性組織に対する具体的な評価点を示したのが図2である。「生活にはりが出る」(172人、23.6%)と「1人ではできないことができる」

表4 JA女性組織への評価

項目	単位：件、%	
	件数	比率(%)
とても魅力を感じている	77	11.5
ある程度魅力を感じている	417	62.1
あまり魅力を感じない	150	22.3
全く魅力を感じない	19	2.8
その他	9	1.3
計	672	100.0

出所：アンケート結果をもとに筆者作成
注：未回答は56である。

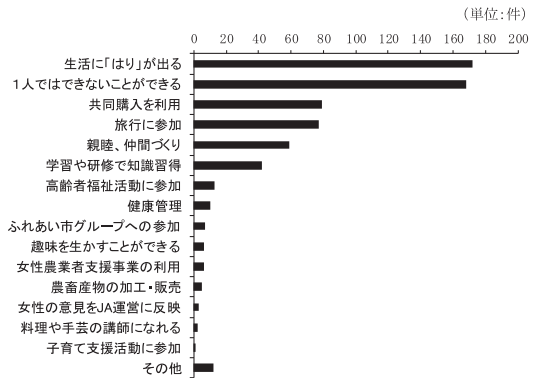


図2 JA女性組織を評価する点

出所：アンケート結果をもとに筆者作成
注：複数回答である。

(168人、23.1%)の比率が高く、力を合わせることで実現できることの喜びをメンバーが実感していることが分かる。一方で、「共同購入を利用できる」(79人、10.9%)、「旅行に参加できる」(77人、10.6%)など、実利に価値を感じるメンバーも多い。また、「学習や研修で知識を高めることができる」(42人、5.8%)、「高齢者福祉ボランティア活動に参加できる」(13人、1.8%)など、学習や社会貢献を、JA女性組織活動の価値と考えるメンバーが一定程度存在している。

2. JA女性組織への不満と改善点

逆にJA女性組織のどのような点に不満や問題を感じているかの質問に対する回答が図3である。

最も多いのが「役員を押し付けられる」(104人、14.3%)であり、役員のあり方について再考が迫られていることが分かる。特筆すべきは、「新しい人や若い人が参加しづらい空気がある」(87人、12.0%)、「活動がマンネリ化している」(51人、7.0%)が高い数値を示していることである。外部に対して閉鎖的・保守的と言われがちな組織の体質に対して、メンバー自身が気付き懸念している。

その改善策を聞いた結果が図4である。特に多かった回答は「新しい人や若い人が参加しやすい雰囲気づくりを進める」(113人、15.5%)、「役員

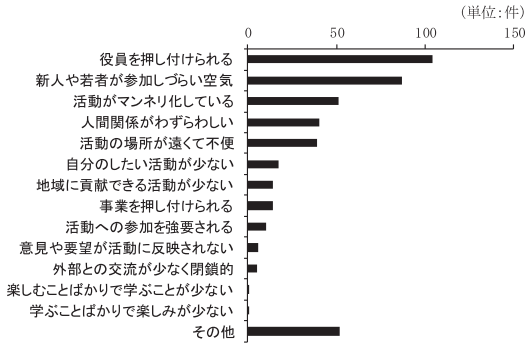


図3 JA女性組織への不満や問題点

出所：アンケート結果をもとに筆者作成
注：複数回答である。

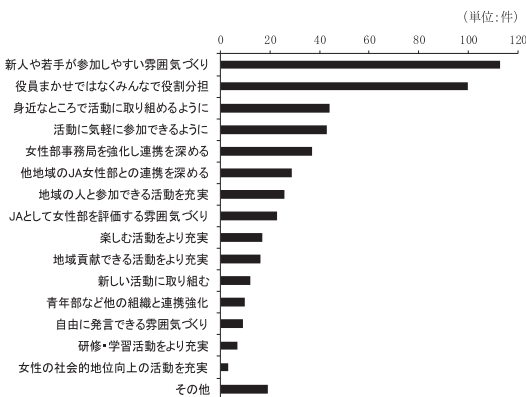


図4 JA女性組織の改善すべき点

出所：アンケート結果をもとに筆者作成
注：複数回答である。

まかせでなく、みんなで役割を分担する」(100人、13.7%)であり、問題点に対応する回答となった。また、「場所的に身近なところで活動に取り組めるようにする」(44人、6.0%)や、「活動に気軽に参加できるようにする」(43人、5.9%)など、メンバーはより参加しやすい方法を求めている。他の地域の女性組織や非農家を含む地域の人々との連携を望む声をも強かった。

しかし、「新しい活動に取り組む」は、12人(1.6%)と少なく、問題点として指摘された「活動のマンネリ化」の解消策は必ずしも考えられていない。

3. 意識と参加の関係性

J A女性組織は魅力的かという設問(表4)と、活動への参加頻度をクロスさせて、折れ線グラフで示したものが図5である。参加頻度は、①週に1回以上、②2週間に1回程度、③1カ月に1回程度、④1年に数回程度以下、の4分類とした。

「とても魅力を感じている」人は、参加頻度①と③が26.0%とやや高いが、他の参加頻度と大きな差は見られず、グラフはほぼ横這いである。

しかし、「ある程度魅力を感じている」では、参加頻度が低下するのに伴って人数が増加し、グラフの線は右下がりとなる。「あまり魅力を感じない」、「全く魅力を感じない」と魅力を感じなくなるに従って、参加頻度が低下するという傾向がはっきりと現れ、右下がりの傾斜がより強くなる。魅力度と活動参加頻度には顕著な相関関係が見られるのである。

このことから、メンバーが高齢化以外の理由により活動から離脱することを食い止め、J A女性組織がより活性化するためには、メンバーにとって魅力的であると思われる活動を強化することが必要不可欠であることが分かる。

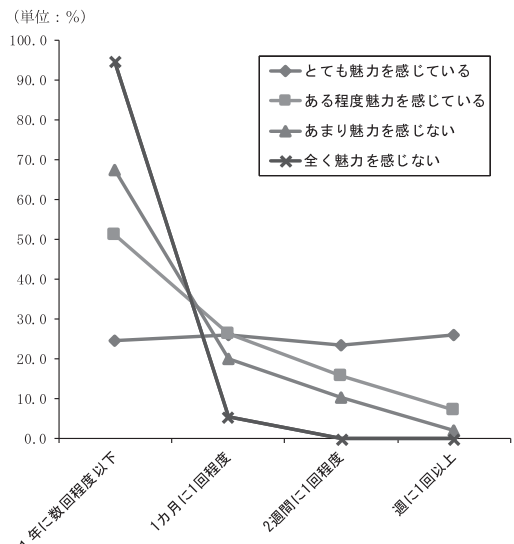


図5 意識と行動の関係性

出所：アンケート結果をもとに筆者作成

V おわりに

アンケートの分析結果をまとめると次の3点になる。

1つ目は、J A女性組織に集うメンバーの属性は多様だということである。メンバーの高齢化は顕著であるが、農業や職業従事、育児や介護など、その生活の守備範囲は広く、公私ともに多忙である。また様々な資格や趣味・特技を有している。これまで見逃されてきた、こうしたメンバーの資質を把握し、J A女性組織活動に関連づけることが、J A女性組織を活性化させる手段になると考えられる。

2つ目は、J A女性組織活動に対して、メンバーは高く評価しているが、課題も指摘していることである。特に組織運営のあり方や組織体制についての課題が指摘されている。メンバーは組織の閉鎖性、保守性に懸念を抱いているが、具体的な解決策を見いだすまでには至っていない。

3つ目は、J A女性組織の活動への評価とメンバーの活動参加頻度には、顕著な相関関係が見られることである。J A女性組織の活動に魅力を感じている人ほど、活動への参加頻度が高く、魅力度が下がるにつれ、参加頻度は目に見えて低くなる。メンバーがJ A女性組織に感じる魅力の源を「自分のしたいことができる(メンバーの意向)」と考えるのであれば、メンバーの意向と活動内容とに齟齬があると、活動が停滞し、結果としてJ A女性組織が先細りすることとなる。

以上の結果を踏まえた上で、J A女性組織が活性化するための新たな方向性として、次の2つを示唆することができる。

1つはメンバーが有する資質を活かす場としてJ A女性組織を位置づけ、メンバーの関心事と結び付けた活動を組み立てることである。例えば、看護師や介護士の資格を持つメンバーが先導する健康管理教室や、J A女性組織が旗振り役となっ

た婚活などがあげられる。活動を目的ごとにしぼった「目的別グループ制度」などで、メンバーが得意分野を活かして講師となり、学び合うことも有意である。

もう1つは、新しい人や若い人が参加しやすい開かれた組織運営に変える工夫を行うことである。長期にわたり活動を続けてきたメンバーが、活動開始時代からの理念に固執することなく、新たなメンバーとともに新たな活動目標を構築しなおすような柔軟さも必要である。また、そのためには事務局による適切な後押しも不可欠である。

J A女性組織が創設された当初は組織に加入することが一般的であり、女性たちの課題や意向も全国的に共通するものが多かった。しかし、女性たちの意向や活動の場が多様化している現在ではJ A女性組織は選択肢のひとつであり、女性たちに選ばれず活動停止や解散といった状況に陥っているJ A女性組織もある。メンバー個人の主体性に焦点を当てたオーダーメイドの組織づくりが必要であろう。

このような努力によりJ A女性組織の魅力を高めることで、高齢化や活動離れによる先細りを食い止め、「誰もが参加しやすく、自己実現できるJ A女性組織」という未来像が展望できるのではないかと。

【参考文献】

- [1] 堀田亜里子「J A全国女性協「J A女性組織意向調査」結果概要」『J C総研レポート』VOL.37、J C総研、2016年、pp.2-11
- [2] 農林中金総合研究所『農協活性化における女性の役割に関する調査』(総研レポート26調、No.5)、2014年
- [3] 小川理恵『魅力ある地域を興す女性たち』農山漁村文化協会、2014年

- [4] 坂本誠「J A女性組織部員の意識と行動に関するアンケート調査の分析～直近後継世代に当たる50代に着目して～」『J C総研レポート』VOL.44、J C総研、2017年、pp.2-9
- [5] 高橋祥世「生活事業・活動と女性部の再興」
坂下明彦・小林国之・正木卓・高橋祥世『総合農協のレーゾンデートル』筑波書房、2016年、pp.93-100

(2020年6月19日受理)